

ふるさと見て歩き

第33回

火伏せの神様



▲橋の下に集積された昨年までの「火伏せの神様」

きな役割を果たしたのが集落内の夜警活動でした。かつてはどの地域でも行われていたが、小田野宿集落でも「番小屋」と呼ばれる小屋に二、三人が詰め、毎晩三回の見廻りを欠かさなかったそうです。三十年ほど前に番小屋は廃止されましたが、その後

も各家から二人ずつ見廻りを出しての夜回りはしばらく行なわれていました。今でも火災予防への心がけは集落全体のつながりとして残っているのです。

◇現代に続く信仰

火災除けの願いは、番小屋が廃止になったあとでも続いています。旧暦の十二月一日には「火伏せの神様」と呼ばれる長さ一メートルほどの男根形の木製の棒を、「番小屋」と呼ばれる小屋に納めて宿内の三叉路に祀る行事が行われています。小田野宿内の五班が毎年交代で担当します。この番小屋は、前述の夜警のために当番が詰めた小屋とは別物です。同名ですがこちらは火伏せの神様が祀られる約二か月間だけ設置されるものなのです。風俗取締が厳しかった時代には、この奉納物をみた巡査が「風紀上よろしくない」という理由で駐在所に持ち帰ったものの、上司にたしなめられ現地に戻した、という逸話も残るほど、当時から人目を引く「変わった」行事だったようです。

当日は、まず班員が鎮守吉田八幡神社で御祈祷を受けた後、番小屋前で清めの盃を酌み交わします。このとき、受けてきた御札も同所に立てます。火伏せの神様は旧暦一月三十一日までの二か月間その場所に祀っておき、その後はすぐ近くの橋の下に廃棄されます。例年、台風などで流されてしまっていました。ここ数年は流されずに橋の下に留まっていたようです(右上写真参照)。これらは、名人と呼ばれる人が代々手がけてきたものです。燃えにくいことから火災除けにも通じる、という意味合いでミズの木を多用していましたが、現在は入手しやすい杉材が使われています。火伏せの神様の傍らには、ワラで編んだ円座と馬簾(ばれん)が共に奉納されます。円座は俵の側面を覆う円形のもの、馬簾はまといに付ける細長く切った紙で、どちらも火を叩き消すという意味が込められていると思われま

す。火伏せの神様が男根の形で表されるのは福島県を中心に例がみられます。「オカマサマ」ともいわれ、上棟式に家の天井裏に奉納されます。火災除けや子孫繁栄の呪力を持つとされ、女性器をかたどったものを一緒に奉納する地域もあるようです。

川和祐知さん、そのさん、坂井義一さんに聞き取り調査に御協力いただきました。

◇小田野宿と火災

国道二九三号線の花立トンネルを美和に向かって抜けたあたりが小田野宿集落です。小田野宿では百二十年間火災を出さなかったことが集落の多くの人の口から聞かれます。実に明治後期以来、ボヤ以上の火災は起きていないというのです。これが集落の誇りとなっていることが伺えます。そこで大



▲かつての番小屋(消防小屋)跡

き、受けてきた御札も同所に立てます。火伏せの神様は旧暦一月三十一日までの二か月間その場所に祀っておき、その後はすぐ近くの橋の下に廃棄されます。例年、台風などで流されてしまっていました。ここ数年は流されずに橋の下に留まっていたようです(右上写真参照)。



▲ワラで作られた円座(右)と馬簾(左)